

# 詩人尹東柱における故郷 —生まれ育った場所「北間島」を中心に—

## The Homeland In the Poems of Yun-Dongju: Focused on Homeland of “Bukgando”

金 雪梅  
JIN XUEMEI

東京外国語大学大学院博士後期課程  
Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

### 著者抄録

尹東柱は1917年に当時「北間島」という現在の中国延辺朝鮮族自治州の龍井市明東村で生まれ、龍井、平壤、ソウル、東京、京都で学校に通い、1945年、第二次世界大戦が終わる半年前に福岡刑務所において、死因不明で没した詩人である。本稿は尹東柱の生まれ育った故郷「北間島」を中心に、彼にとって「北間島」はどのような場所で、彼の詩の中でどのように現れているのかを分析する。歴史的にも、地政学的にも複雑な「北間島」で生まれた尹東柱の故郷は「祖国・朝鮮」の喪失により、彼の故郷も喪失に至ったという民族的枠組みの研究によって無化されてしまう「北間島」を、彼の詩の言葉から再び立ち上げる。ここでは尹東柱がいた三つの地域「満洲」、「朝鮮」、そして日本のそれぞれの場所で書いた詩を各場所の視点から眺め直すことで、尹東柱の「北間島」という故郷について考察する。

### Summary

Poet Yun Dongju was born in 1917 in the village of Myongdong Bukgando (now Longjing city, Yanbian Korean autonomous region, China). He attended schools in Longjing, Pyongyang, Seoul, Tokyo and Kyoto, and died six months before the end of World War in a Fukuoka prison. His cause of death is unknown.

This article examines Yun Dongju's "homeland," Bukgando, and explores his perception of this "homeland"—the place he was born and raised—and the ways in which it is represented in his poetry. This analysis will relocate from Dongju's poetry Bukgando's complex history and geopolitics—all of which become lost in the discursive ethno-centric framework that posits Dongju's loss of Bukgando in parallel to his loss of Korea as national "homeland." In this article, I will consider Yun Dongju's homeland "Bukgando" from his literary works composed in Manchuria, Colonial Korea, and Japan, re-examining his work through his perception and experiences in each site.

### キーワード

尹東柱 故郷 「北間島」 「満洲」 「朝鮮」

### Keywords

Yun Dongju; Homeland; "Bukgando"; "Manchuria"; "Colonial Korea"

原稿受理日: 2020.1.27.

*Quadrante*, No.22 (2020), pp.197-212.

### 目次

はじめに

1. 「北間島」の歴史と特徴

1-1. 「北間島」の特殊性

1-2. 「北間島」の民族教育とキリスト教

2. 故郷という意識の目覚め——平壤、「満洲」で歌う

3. 〈自分探し〉の場所——朝鮮・「ソウル」で「呼ぶ」

4. 異国で懐かしむ——日本・東京で書く

おわりに

### はじめに

尹東柱は1917年に「北間島・明東村」現在の中国吉林省龍井市に生まれ育ち、その後1938年に朝鮮の「延禧専門学校」（今の延世大学）に通い、1942年に日本の立教大学と同志社大学に留学するが、在学中に治安維持法で逮捕され、1945年戦争が終わる半年前に福岡刑務所で不確かな死因により没した詩人である。

27年という短い人生にも関わらず、彼の詩は韓国、日本、中国（主に朝鮮族）、そして北朝鮮でも愛され、そして関心を集めてきた。本稿が数ある朝鮮民族の詩人の中で、特に尹



東柱に着目した理由は、彼の生まれ育った「北間島」という地域が歴史的にも、地政学的にも複雑であり、この地を「故郷」とする尹東柱を考察することで、植民地—帝国に生きた人々の姿、そしてそのアイデンティティの複雑性を解明する一助となるのではないかと考えるからである。

「朝鮮」から「間島」への移住や短期間生活していた作家は多いが、尹東柱のように「間島」で生まれ成長し、また遺骨もここに残っている作家は少ない。そうした意味において、尹東柱を他の朝鮮半島出身の朝鮮詩人たちと同じように考えてはならない。つまり尹東柱の詩にとって、故郷「北間島」という場所は、単に一言で済まされるような単純な地名ではない。その場所での彼の特殊、個別的な経験は、必ず検討されねばならないのである。

「間島」といえば、1885年清政府が封禁政策を解禁し、朝鮮人移民を許可した場所で、現在の中国延辺地域にあたる。そのような明確な場所であるにも関わらず、これまでの尹東柱研究では、彼の出生地については、ただ北間島と述べられるだけで、その場所と彼の詩作が結びつけられて検討されることがなかった。ともするとその「北間島」がどこにあるかわからないような、あるいは、どこであっても良いような、特色のない空白として軽視されてきた。

尹東柱の「故郷」についての研究がはじめて出されたのは1987年で、その後、呉養鎬によって、尹東柱の故郷という意識は「遊浪意識」<sup>1</sup>であるとされた。さらに呉は尹東柱は故郷を「喪失」したが、その苦痛や現実を嘆くのではなく、期待する故郷、まだ希望はある

故郷だと分析した<sup>2</sup>。他にもまた彼の「失郷意識」<sup>3</sup>が詩に作用するという意見は多く、その議論の中では尹東柱は中国の「満洲」地域に生まれたが、そこは完全なる故郷ではなく、彼は民族共同体の元々の故郷、朝鮮を懐かしんだという見解が多かった。それは尹東柱の祖先が移住した地「北間島」という故郷の個別性を看過し、彼の故郷は「祖国・朝鮮」であると当然視した上で、その喪失を強調するという傾向がある。

尹東柱が最初に韓国で発見されて以降、彼に関する研究に変化があったとしたら、彼が「満洲国」出身であることが強調されてからだと言える<sup>4</sup>。近年彼の研究は、特に「ディアスポラ」や「移民」という観点から、国境なき詩人として彼を位置づけ、分析するような傾向があり、従来の抵抗詩人、民族詩人、愛国詩人、国民詩人としての位置からディアスポラ詩人、境界人として彼を評価しようとする。さらに尹東柱の「朝鮮」や民族意識を一方的に強調するのではなく、「満洲—北間島」のことも含め、正確に分析しようとする研究方向がある。だが、尹東柱の「故郷喪失」が前提になり、どちらにも属さない、帰属地がないものとして彼を捉えているところがあると考えられる。また尹東柱の「故郷」に関する研究は、中国でも行われ<sup>5</sup>、いずれも「故郷喪失」に焦点を当てており、韓国での研究範疇を超えていないと言わざるを得ない。

尹東柱が日本に留学していた時、叔父との会話の中で、「叔父：将来どこに住みたい？／東柱：私が生まれ育った明東」<sup>6</sup>と話したという逸話がある。この話からも分かるように「北間島・明東」は、ただ生まれた場所ではなく、

<sup>1</sup> ここでの「遊浪」は一定の居住地がなく、彷徨うことを意味する。

<sup>2</sup> 呉養鎬「尹東柱の詩に現れる故郷の意識」（韓国語文学会、1988）pp.89-93.

<sup>3</sup> 鄭漢模「尹東柱의 特質과 詩史的 意味」（『シムサン』1975・2）p.110.

<sup>4</sup> オ・ムンソク「尹東柱と多文化的主体性の文学」（韓国近代文学会、2012）

<sup>5</sup> 中国での尹東柱の「故郷」に関する研究は、リ・ミスク（2013）「尹東柱の詩に現れる場所と場所喪失」、張春植（2013）「尹東柱の詩の移民文化的性格」、キム・クアンウン（2013）「ディアスポラ詩人尹東柱の詩と北間島」などが挙げられる。

<sup>6</sup> 尹永春「明東から福岡まで」『ナラサン（愛国）23号』、1976、p.108.

尹東柱が将来住みたい、長く居続けたい場所であることが分かる。このような想いを無視し、祖国——民族意識を基礎とした国家——の喪失だけを強調するのは、尹東柱の精神と地理の故郷に対してあまりに表面的ではないだろうか。

1880年代に尹東柱の祖父は朝鮮から「間島」に移住し、定着し、生活してきた。それは現在の中国朝鮮族の初期移住者の原形でもある。「北間島」に移住し、そこで生まれ育った朝鮮民族の一人として、故郷をどのように意識したのかは、彼が生まれ育った場所と「祖国・朝鮮」、そして帝国日本をどのように結びつけたのかという問題と深く関わってくる。尹東柱は現在、韓国、日本、中国そして北朝鮮（朝鮮人民民主主義共和国）で知られた詩人である。そのようなコスモポリタンなイメージのある詩人ではあるが、彼がどのように自身を位置付けたかという問題はまた別の次元にあるはずだ。「故郷」というものは「個人の人生のアイデンティティーと自己アイデンティティーの形成の基盤となる」<sup>7</sup> ため、彼の詩作における故郷表象の分析を通して、尹東柱のアイデンティティーと存在を明確にすることができると考える。

本稿は、尹東柱が生まれ育ち、また20年間住んでいた故郷「北間島」が彼にとってどのような場所で、また彼の詩の中でどのように現れているのかを分析する。尹東柱の詩に表象される「故郷」の分析を通して、彼の詩と彼の生まれ育った北間島という空間を有機的

に結びつける。それはひいては尹東柱と同じ民族の祖先を持つ朝鮮族たちの「故郷」という意識を喚起させることにも繋がるだろう。

## 1. 「北間島」の歴史と特徴

まず、「北間島」という場所はどういう場所であったのか。

### 1-1. 「北間島」の特殊性

「間島」とは今の中国延辺朝鮮族自治州とほぼ重なる地域で、中国吉林省東南部に位置し、朝鮮半島と国境を接する地域である<sup>8</sup>。「間島」という言葉は文字通り、中国と「朝鮮」の間にある孤立によって島のような場所から名付けられた。元々豆満江の北を「間島」と呼んでいたが、後に鴨緑江の北を「西間島」とし、豆満江以北を「北間島」として、区別して呼ぶようになった<sup>9</sup>。国境が単に豆満江（中国側では図們江）によって隔てられたにすぎないため、この間島の帰属を巡っては、「清朝」と「朝鮮」との間では争いが絶えなかった。「1885年9月から11月まで乙酉勘界談判<sup>10</sup>、1887年3月から4月まで丁居勘界談判<sup>11</sup>」が行われたが、国境を定めるに至らなかった<sup>12</sup>。つまり、国境がまだ明確に区分されてない時期に、朝鮮の人は密かにまた様々な歴史的理屈から止むを得ず「間島」に入り、開墾し、居住したのである。

朝鮮人の「間島」移住は19世紀中盤から始まり、1886年尹東柱の曾祖父尹在玉は家族を連れて「朝鮮」の咸鏡北道鍾城郡から近

<sup>7</sup> ジョン・クァンシク『故郷』文学と知性社、2010、p.28.

<sup>8</sup> 金珽実『満洲間島地域の朝鮮民族と日本語』花書院、2014、p.1.

<sup>9</sup> 宋友恵『空と風と星の詩人 尹東柱評伝』（ソジョン・シカク、2015）p.37.

<sup>10</sup> 「乙酉勘界談判」は1885年9月、清朝両国は間島の領有権を巡って、会寧で行われた会議。交渉の内容としては1712年清政府と朝鮮との国境を画定するため、長白山の山頂に立てた「定界碑」の碑文を如何に解釈するのが焦点であった。「図們江説」と「土門江説」を巡って、激しく対立し、最終的に実地調査の上で、交渉を再開することで合意した。白榮勳『東アジア政治・外交史研究——「間島協約」と裁判管轄権——』、大阪経済法律大学出版部、2005、p.17.

<sup>11</sup> 「丁居勘界談判」は1887年4月に「乙酉勘界談判」の実地調査の結果を踏まえて行われた二回目の交渉である。朝鮮代表の清国側の「図們江説」に異議を示さなかったことにより、交渉の重点を図們江の源流一帯の境界確定問題にし、清国側の「石乙水」が源流の主張と朝鮮側の「定界碑」に近い「紅土水」が源流であると異を唱えたため、双方は再び対立して、物別れのままで終わった。白榮勳『東アジア政治・外交史研究——「間島協約」と裁判管轄権——』、大阪経済法律大学出版部、2005、p.17.

<sup>12</sup> 金珽実、前掲書、p.1.



い「間島」の琿春副都統寧遠堡開遠社の子洞に移住した。当時尹東柱の祖父尹夏鉉は11歳であった<sup>13</sup>。尹東柱一家は朝鮮人の「間島」移住の初期移住者に当たる。

金（2014）によると国境がまだ定まってない時期であるため、「朝鮮人」をめぐる、中国と日本の間で、管轄権の争奪があり、「北間島」をめぐる問題はその地理的な政治だけでなく、そこに居住する人間についてより複雑な政治の場所ともなった。特に日韓併合以後朝鮮は日本国の統治下に属することとなり、朝鮮人に日本の国籍を与えることにもなり、金（2014）によると1912年成立の中華民国は、「間島」地域内に住む朝鮮人が日本帝国主義の「満洲」進出の尖兵になることを恐れ、中華民国への帰化条件を無効にした。それにより数多くの朝鮮人は中華民国に帰化したため、二重の国籍問題が生じたのである<sup>14</sup>。

「間島」地域は朝鮮人が移住し始めた時から1932年にかけて、時代が「清朝」から中華民国（1912）に変わり、1932年には「満洲国」という新しい「国家」になった。また朝鮮では1910年に日本に併合されるため、「朝鮮人」は1910年以後「日本人」の中に組み込まれることとなる。もちろん平等な「臣民」ではなく、日本植民地に生きることを強制させられた人間としての臣民であった。元々地理的、歴史的的特殊性を持っていた「間島」地域は、日本の植民地戦略により、さらに複雑になり、「間島移民」の朝鮮人たちは日本と中国の勢力に抑圧され、左右されたのである。

## 1-2. 「北間島」の民族教育とキリスト教

「間島」地域における朝鮮人による朝鮮人への教育は、いわゆる民族教育とキリスト教教育の二つが中心であった。なぜなら、そこ

にいた教育者たちは朝鮮半島から移住した者であり、かつキリスト教徒であったからである。民族独立の揺籃地と呼ばれるほど、教育の中心地となったのが、尹東柱が通っていた明東小学校である。朴（2018）によればそこは朝鮮の独立運動家を育てる学校として、創設初期の教員では朝鮮国内から亡命してきた若い民族独立を願う人士が多く、また徹底的な民族教育を実施していたため、その小学校の名は広く知られ、「間島」はもちろん、ロシア沿海からも学生が集まり「北間島民族教育と独立運動の本拠地」となったという<sup>15</sup>。

明東小学校について、尹東柱より1歳年下の金禎宇の証言を見ると、

「明東小学校四年生の時、東柱はすでにソウルから少年少女のための月刊雑誌を購読していた。東柱の従兄で同じ歳の宋夢奎という友達がいた。彼もやはり文学少年だった。夢奎は『子供（어린이）』という雑誌を、東柱は『子供の生活（아이 생활）』という雑誌をソウルから取り寄せて読んでいた。村の子供たちは彼らが全て読み終えた後で、それを借りて読んだ。二人の少年がソウルから月刊雑誌を購読して読むというのは、その当時の満洲のへんぴなところでは大きな事件というほかなかったし、それが村に大きな影響を与えて『三千里』のような月刊誌が青年たちの間に広く普及した。

五年生になると、東柱と夢奎の発議で月刊誌を謄写版刷りで出すことを決めた。原稿を集め編集を終えて雑誌の名を決めることになり、その当時我々の担任の先生で尊敬の的だった韓俊明牧師を訪ねて、相談に乗ってもらった。先生は我々を

<sup>13</sup> 李光仁『詩人尹東柱の人生の旅研究』、民族出版社、2015。

<sup>14</sup> 金珽実『満洲間島地域の朝鮮民族と日本語』（2014）、有限会社花書院、p.33。

<sup>15</sup> 朴金海「20世紀初間島地域キリス教系学校の成立と民族教育」『尹東柱とその時代』、延世大学国学研究員 延世学風研究所編、2018、p.18。

褒めて、『新しい明東』と名付けたらいいと言われ、その名前で何号か発行した。」<sup>16</sup>

ここからも学校の先生が牧師を務めていることがわかり、小学校の時からソウルの雑誌を購読し、また出版に至ることができたのは、明東小学校における自民族の言葉を重視し、大事にしようとするのと尹東柱の後の人生とが繋がると考える。

民族意識が高い場所で生まれ育った尹東柱は常に抗日運動の意識を保って日常的に実践もする周囲の人を通じて、「祖国・朝鮮」は占領されたが、自分には民族の根源地の「故郷」があることを自覚した。将来、朝鮮民族の心を保ちその言語を貫いた詩人になったことも明東学校と関わりが深いと言えよう。

明東小学校が設立された後、間島の教育事業を再建するという目的でソウルの鄭戴冕は「北間島」の教育団団長として派遣される。鄭戴冕はソウルにあるキリスト教系の「新学問」教育機関で学んだ敬虔なクリスチャンで、プロテスタント（長老派）の信者でもある<sup>17</sup>。彼は明東小学校で教監職に就任することを条件に、正規科目として、学生に聖書を教え、学生とともに礼拝をすることを要求した。つまり儒教思想を捨て<sup>18</sup>、キリスト教を信仰するように、学校に提案・主張したのである。「救国」の理念を持ってキリスト教を受け入れた金躍淵は後に平壤の神学校に通い、長老教会の牧師に任命される<sup>19</sup>。

金躍淵は尹東柱の母金龍の腹違いの兄で、尹東柱の叔父であり、普段近くに過ごしてきた

親戚であったため、1910年、尹東柱一家がキリスト教を受け入れたのは金躍淵の影響があったと考えられる<sup>20</sup>。このように尹東柱が生まれた時、尹東柱の家族は皆キリスト教をすでに信仰するようになっており、彼も生まれてすぐ「幼児洗礼」<sup>21</sup>を受け、明東教会の一員として教会に出席をしていた。

「間島」地方のキリスト教は19世紀半ばから、アメリカ、カナダ、スコットランド、オーストラリアなどの国の宣教師たち（プロテスタント）によって伝えられた。1909年、アメリカ南部メソジスト教会とカナダ長老教会のあいだに北「間島」と江原道地域の相互委譲の問題が起こり、結局、「北間島」はカナダ長老教会（プロテスタント）が宣教するようになる<sup>22</sup>。元々明東村は儒教が伝統的な宗教で、祖先に祭祀を捧げることが伝統であったが、1909年キリスト教が明東に入ってから、キリスト教が盛んな村になった。後に教会も建てられ、村の半分以上がキリスト教を受け入れるという状況になる。

しかしその後、1928年中国共産党の社会主義思想が「北間島」に入り、1929年には「北間島」で朝鮮人が経営している学校は全部県立学校に改組させられ、それにより明東小学校は「人民学校」になり<sup>23</sup>、後に、尹東柱と宋夢奎の一家は居住地を龍井に移した。

龍井にきた時尹東柱は恩真中学校に進学をするが、恩真は1920年カナダの宣教師によって創設された学校で、恩真という名も「神の恩恵を受ける」という意味である。当時恩真中学校は国と民族を救おうという救民思想を持っ

<sup>16</sup> 宋友恵『空と風と星の詩人 尹東柱評伝』、ソジョン・シカク、2015、p.88.

<sup>17</sup> 金珽実『満洲間島地域の朝鮮民族と日本語』、花書院、2014、p.84.

<sup>18</sup> 同上。

<sup>19</sup> 蔵田雅彦「韓国キリスト教が生んだキリスト教詩人・尹東柱」『新版 死ぬ日まで天を仰ぎ——キリスト者詩人・尹東柱』、日本キリスト教団出版局、2005、p.32.

<sup>20</sup> 同上、pp.58-59.

<sup>21</sup> 幼児に洗礼を施すこと。洗礼とはキリスト教徒となるために教会が執り行う儀式。

<sup>22</sup> 蔵田雅彦「韓国キリスト教が生んだキリスト教詩人・尹東柱」『新版 死ぬ日まで天を仰ぎ——キリスト者詩人・尹東柱』、日本キリスト教団出版局、2005、pp.36-37.

<sup>23</sup> 宋友恵『空と風と星の詩人 尹東柱評伝』（愛沢革訳）、藤原書店、2009、p.79.

た学生たちが多数であった学校でもあった<sup>24</sup>。

このように「北間島」の教育は常に民族運動とキリスト教が一緒になり、尹東柱も民族教育を受けながら、キリスト教教育を受け入れたはずである。小学校から大学まで一貫してキリスト教精神を基盤にしている学校に通ったのも事実であり、「安息日」（日曜日）には教会が運営する日曜学校に通い、賛美歌を歌いながら成長していった。そのような尹東柱は、聖書を通して、キリスト教の教理を深く獲得していったにちがいない。

中国の「北間島」を「故郷」として生まれた朝鮮民族のキリスト詩人尹東柱は、国境・土地・国籍・法律的帰属などがすべて不確かな時代において20年間「北間島」で過ごした。そしてその「北間島」の地で、民族を「故郷」とする教育を受け、キリスト教の理想を「故郷」とする教育を受けた。「北間島」という場所は地理的にも歴史的にも非常に特殊な場所であり、こうした複雑な要因から、彼の「故郷」は複層的な様相を帯びることになった。

ゆえに筆者は彼の中には以下の三つの故郷があると考ええる。一つはその人間が生まれ育ち、成長した実の故郷、即ち「北間島・明東」で、もう一つは民族、文化、言語、祖先の繋がりがあある精神的な故郷である「朝鮮」、そして最後の一つはこの世には存在しない、人間の最終的に行く場所「神の国＝天国」という故郷である。

「生まれ育った故郷」とは単なる地理的な場所ではなく、現在私たちが読んでいる彼の詩の基盤となった場所であり、彼の民族思想とキリスト教思想を育んだ場所でもある。また、彼は一人の朝鮮人として、日本警察に逮捕され、刑務所に入り、亡くなったのであるから、祖国「朝鮮」は彼にとって非常に大きな意味を持っている。さらにキリスト教の家庭で生まれ育ち、一貫してミッション系の学校に通ってい

た彼は、人間が最終的に行く「天国」を信じていたはずである。本稿は、彼の三つの故郷のうち、「生まれ育った故郷」である北間島を中心に考察し、民族とキリスト教としての故郷は別稿に譲ることにする。尹東柱は生涯一つの場所に留まったのではなく、帰郷と離郷を反復した。ここでは彼が平壤、「満洲」、「ソウル」、そして日本のそれぞれの場所で書いた詩を各場所の視点から眺め直すことで、彼の生まれ育った故郷「北間島」を考える。それは民族的枠組みを重視する研究によって無化されてしまう「北間島」を、彼の詩の言葉から再び立ち上げることでもある。

また本稿の詩の日本語訳は、1955年に正音社で出版された詩集『空と風と星と詩』を底本として筆者が翻訳したものであるが、一部は1984年に出版された伊吹郷訳の『空と風と星と詩』と2012年岩波文庫から出た金時鐘訳の『尹東柱詩集 空と風と星と詩』を参考にした。その箇所は注釈で説明したい。

## 2. 故郷という意識の目覚め——平壤、「満洲」で歌う

「故郷」とは何か。ジョン・クアンシク『故郷』（2010）を見ると「故郷」という言葉は元々自分が生まれ育った場所のことを指す。そして、この概念は大きく四つの性格を持っている。それは、「時代性」（時間的に遡った場所）、「回想性」（追憶と童心に繋がる人生の空間）、「隠匿性（純粋性）」（都市のように表に出ているのではなく、隠れている領域）と「風景性」（幼い時に遊んでいた河、山、海がある場所）である。つまり「故郷」は単純な地域や場所というだけではない、個人の人格及び人生と繋がる空間でもある<sup>25</sup>。

1886年、尹東柱の曾祖父は故郷「朝鮮」咸鏡北道鍾城郡から「北間島」の子洞に移住し、1900年に龍井の明東に移り、尹東柱は

<sup>24</sup> 李光仁『詩人尹東柱の人生の旅研究』、民族出版社、2015、p.160.

<sup>25</sup> ジョン・クアンシク『故郷』、文学と知性社、2010、p.25.



時 期	題 名	関 連 語
1935 年 10 月	南の空	郷愁に乗り、南の空へ飛びまわるばかり――
1936 年 3 月 25 日	黄昏	北の空に翼を広げたい
1936 年 6 月 10 日	このような日	五色旗と太陽旗、「矛盾」
1936 年 6 月 26 日	陽だまり	地図取り遊び、誰の土地とも知らぬ

【表 1】延禧専門学校入学前に書かれた「北間島」と関わる詩  
\* 崇実中学校入学時期：1935 年 9 月～1936 年 3 月

1917 年、明東で生まれた。

現在出版され、読まれている尹東柱の詩は全部で 124 篇<sup>26</sup>だが、そのうちもっとも知られて愛読されている詩のほとんどは京城（ソウル）と日本で書かれた詩である。しかし、実際には全詩作の三分の二を占める 77 篇は彼が延禧専門学校に入る前に書いたである。本節では、尹東柱が初めて故郷「北間島」を出て平壤に行き、延禧専門学校に入る前（1937 年 10 月）に書かれた詩の中で、故郷や郷愁に関わる詩、主に「郷愁」、「北の空」、「地図」などのような関連語が登場する詩を選び、そこから見られる尹東柱の「満洲・北間島」という故郷への思いを考察する。

まず、専門学校に入学する前に書いた「北間島」という故郷が現れる詩を見ると、【表 1】の通りである。

南の空

つばめは二つの翼を持っている。  
うら寂しい秋の日――

母のふところ<sup>27</sup>が懐かしい  
霜が降りる夕方――  
幼い魂は片翼の郷愁に乗り  
南の空を飛びまわる――

1935・10・平壤にて

尹東柱は 1935 年 9 月に平壤にある崇実中学校に入学し、後に神社参拝の問題<sup>28</sup>で退学するが、平壤への進学は尹東柱にとっては初めての離郷であり、当時 17 歳の彼にとって故郷を離れるというのは厳しい経験であったろう。この「南の空」の第二節で分かるように、「母のふところ」とは母がいるところ、つまり当時の「満洲一龍井」が懐かしく、「幼い魂は片翼の郷愁に乗り／南の空を飛びまわる――」は、母のもとに帰りたいが、帰れないので、「満洲」より南にある平壤という場所の上空で、飛び回るしかないと言っていることが分かる。この詩を作った時期から、彼は故郷を離れてまだ一ヶ月であり、母と実家のことを日々忘れることができずにいたこと、まだ若く、環境によって感情が左右される時期にあったことが分かる。

この詩と関連して「黄昏」（1936）はある日の午後、カラスの北行を見て、自分も翼を広げて、北の空に行きたいという内容の詩である。上にも言ったように「満洲」は地理的に平壤の北に位置しているため、作者は故郷があるところ、つまり「満洲・北間島」に帰りたいと言っていると読み取れる。

黄昏

日差しは障子の隙間から  
細長い日 一文字を書いて……消し……  
カラスの群れが屋根の上へ

<sup>26</sup> 王信英、沈元燮、大村益夫、尹仁石共同出版『写真版・尹東柱自筆詩稿全集』、民音社、1999。  
<sup>27</sup> 尹東柱『空と風と星と詩』（伊吹郷訳、影書房、1984）「南の空」の訳から「ふところ」という単語を引用。  
<sup>28</sup> 尹東柱が通っていた崇実中学校は伝統的なキリスト教の学校であって、「内鮮一体」政策の下皇民化を図る総督府は、その柱として神社参拝を強要し、最初にキリスト教学校を対象に実施した。その時尹東柱は友人文益煥と自らの意思で退学をする。その後 1938 年 3 月に崇実中学校は廃校となる。

ふたつ、ふたつ、みつつ、よつ、何度も  
飛んで通る。

すくすく、くねくね北の空に、

おれこそ……

北の空に翼を広げたい。

1936・3・25 平壤にて

「矛盾」の二字を理解できぬほど  
頭が単純だったのか。

このような日には

失われた頑固な兄を

呼びたい。

1936・6・10

1936年3月まで平壤にいた尹東柱のこの詩は、「崇実学校」を退学し、「満洲」に帰る直前に書いた詩であり、郷愁の思いが色濃く、早く平壤を離れ、北の家に帰りたい感情が強く感じられる。「崇実学校」の神社参拝の問題で、通う学校がなくなるという不安な状況の中、まだ幼い尹東柱は、自分の家族がいるところ「満洲・北間島」に帰りたくなかったのではないだろうか。「翼を広げたい」が、思う通りに広げられない彼がいた場所の現実状況を垣間見ることができる。このように、初めて故郷を離れた時の尹東柱にとって、「満洲・北間島」という場所は、彼の母を始めとする家族がいる場所、そして歴史的に被ってきた国際政治的、植民地的事情の中でも、安心・安住できる帰りたい場所、であることが分かる。

また、尹東柱は故郷「北間島・龍井」を離れて、親と家族がいない平壤で学問に専念している間、自分が生まれ育った地域の現状を意識するようになる。それは詩「このような日」を見ることによって分かる。

### このような日

仲の良い正門の二つの石柱の端で

五色旗<sup>29</sup>と太陽旗が踊る日、  
線を引いた地域の子供達が喜んでいる。

子供たちには一日の無味乾燥な学課で  
もの憂い<sup>30</sup> 倦怠が染み渡り

「満洲国」が成立し、「民族協和」という上辺だけのスローガンを掲げながら、実際には帝国日本の統治下にあるということを自覚した尹東柱は、先行研究が言うような「北間島」が本当の故郷ではないと思った。というよりも、むしろこの場所も日本に統治されることになったのを意識し、「朝鮮」と「北間島」との心の葛藤を結び付けられるようになったと見るべきである。また「線を引いた地域の児らが喜ぶ」とは、自分が住んでいた場所がある日突然「満洲国」という新しい「国」になるが、実は日本が背後で「満洲」地域を支配下に置こうとする陰謀を知らずに、子供たちは無邪気に喜んでいる様子である。五色旗と太陽旗が門の前に掲げてあることの「矛盾」を知らない子供たちを見て「満洲」地域にいる人の無力さとその土地を奪おうとする日本の欲望についても感知していたことがわかる。

### 陽溜り<sup>31</sup>

むこうへ 黄土を載せたこの地の春風が  
胡人の糸車のように廻って過ぎ去り

まだら模様をつくる四月の太陽のさしのべる手が  
壁を背にした悲しい胸ごと すみずみま  
で撫でる。

<sup>29</sup> 五色旗は「満洲国」の国旗である。

<sup>30</sup> 尹東柱『空と風と星と詩』（伊吹郷訳、影書房、1984）「このような日」の訳からこの箇所を引用。

<sup>31</sup> 伊吹郷訳『空と風と星と詩』（影書房、1984）



地図取り遊びに 誰の土地とも知らぬ児  
が二人  
指幅の狭さを嘆くか

よせ! そうでなくても浅い平和が  
破れはしないか気がかりだ。

＊胡人 満洲族

1936・6・26

また「陽溜り」は尹東柱が平壤から龍井に戻って光明中学校に通った時に書いた詩で、自分と満洲族の人は同じ土地で暮らし、この地は「満洲国」になったことを自覚していることがわかる。「地図取り遊びに／誰の土地とも知らぬ児が二人」は「満洲」の土地をめぐって、奪い取る日本と中国（中華民国）の関係の中、「浅い平和が破れはしないか気がかりだ。」というのは、日本と中国の勢力争いの渦中におり、いつでも戦争になり得る状況の中、戦争になることを恐れる語り手の不安が感じられる。「朝鮮」は祖国で、祖先の故郷でもあるが、まだこれを自分の故郷として意識することができず、日本と中国の間にいる自分たち（朝鮮人移民）の立場を認識し、その中間で生きるしかない当時の間島「満洲移民」の立場、運命を表した詩でもある。

「間島」に根を下ろして生活する移民の子孫として生まれた尹東柱は、「民族教育」を通して、「祖国・朝鮮」に故郷があるということを教えられた。しかし、そこが本当に彼の故郷なのかを確かめるために「朝鮮」で学問をしたのかもしれない。

尹東柱は平壤の「崇実学校」に入ってから六ヶ月後には故郷に帰るが、このとき故郷「満洲・北間島」の地政学的な現実を目覚め、中国と日本の間に生きるしかない「間島移民」の立場と「北間島」という場所の特殊性について

も認識するようになる。「満洲国」が成立する以前の「北間島・明東村」は日本の統治が緩く、家庭も経済的に裕福だった尹東柱はレベルの高い文化的・思想的教育と雰囲気の中で成長した<sup>32</sup>。上記のような朝鮮民族の移民史は外来の近代帝国植民地主義による政治が背景にあって始まったのは事実だが、移住者たちは常にその移民先の場所に、朝鮮民族らしくまた自分らしく根を張ろうとしていたのである。ゆえに、中国大陸東北移民の朝鮮人として尹東柱の人生と意識を「故郷喪失」・「遊浪」などの表面的な言葉で定義し、「受難」と「抵抗」のみの側面を繰り返す叙事化は、彼の心の内にある地理的故郷を分析するに単純すぎると考える。

### 3.〈自分探しの場所〉— 朝鮮・「ソウル」で「呼ぶ」

「ある場所への愛着ができるまでには時間が必要である。しかし単なる継続よりも、経験の特質と強さの方が重要である」<sup>33</sup>とイーフー・トゥアンも言うように尹東柱にとって「満洲・北間島」も単なる生まれ育った場所、両親がいるから自分もいるような場所ではなく、そこは、尹東柱が成長した経験、追憶、そして彼の詩創作の基本素材たる自然的、社会的環境を提供した。

尹東柱の故郷「北間島」に対する思いはソウルの「延禧専門学校」に来てからも見られ、その思いは卒業の三ヶ月前に強くなる。それが表れるのが以下の「星を数える夜」という詩である。この詩は故郷「北間島」のことを懐かしんだ最も代表的な詩で、ソウルにしながら、「北間島」にいる母に対する思い、子供の時一緒に遊んだ友人のことを懐かしむ詩でもある。

<sup>32</sup> 鄭雨澤「在満朝鮮人の混種的正體性と尹東柱」（『語文研究』、2009）

<sup>33</sup> イーフー・トゥアン『空間の経験—身体から都市へ』、ちくま学芸文庫、2009、p.352.

星を数える夜

季節が過ぎて行く<sup>34</sup> 空には  
秋でいっぱい満ちています。

私は何の心配もなく  
秋の中の星を全部数えられそうです。

心に一つ、二つ刻みつける星を  
今、全部数えられないのは  
間も無く朝が来るからであり、  
明日もまた 夜が残っているからであり、  
まだ私の青春が尽きていないからであります。

星一つに追憶と  
星一つに愛と  
星一つにわびしさと  
星一つに詩と  
星一つにお母さん、お母さん、

お母さん、私は星一つに美しい一言を  
呼んでみます。小学生の頃机を共にした  
子供達の名前と、佩、鏡、玉という異国  
の少女たちの名前とすでに赤ん坊の母に  
なった乙女たちの名前と、貧しい隣人の  
名前と、鳩、子犬、ウサギ、ラバ、ノロ鹿、  
フランシス・ジャム、ライナー・マリア・  
リルケという詩人の名前を呼んでみます。

この人たちはとても遠くにいます。  
星がとても遠いように、

お母さん、  
そしてあなたは遠くの北「間島」にいます。

私は何か懐かしくて  
この多くの星の光が落ちる丘の上に

私の名の文を書いてみて、  
土で覆ってしまいました。

そういえば徹夜して泣いている虫は  
恥ずかしい名前を悲しんでいるのです。

しかし冬が過ぎ 私の星にも春が来れば  
墓の上に緑の芝が咲くように  
私の名が埋められている丘の上にも  
誇らしく草が茂るはずです。

1941・11・5

この詩は小学生の子供たち、異国少女、乙女、動物、そして詩人の名前が出てくるため、当時「朝鮮人」を対象に実施した「創氏改名」という歴史事実からこの詩は抵抗詩であるというのが最も一般的な解釈だが、本論文では違う角度から考えてみたい。ここでは、この詩を尹東柱が自分と関連がある「名前」を通して、「自分」という存在を探す過程であると考えたい。しかも、そのような名前を持った自分と関連があるものたちは、すべて故郷「北間島」にいるのである。

「故郷では個人の本質の規定及び実存的反省の側面が優先される」<sup>35</sup> つまりソウルにいながら彼は、母がいる場所「北間島」のことを思っていたが、それは追慕だけでなく、自分が生まれ育った場所を通して、自分はどこから来て、またどこへ行くべきなのかということを考え、その答えを彼の出生地、家族がいる「故郷」に探そうとしていた。「星を数える夜」の詩を書いた時期の前後を見ると、尹東柱はこの詩を書く前に、「道」という詩を書いており、またその後に「序詩」という詩を書いている。

道

失くしてしまいました

<sup>34</sup> 尹東柱『空と風と星と詩』（金時鐘編訳、岩波文庫、2012）「星を数える夜」の訳から「過ぎて行く」という言葉を引用。

<sup>35</sup> ジョン・クアンシク『故郷』、文学と知性社、2010、p.33.

何をどこで失くしたかわからないので  
両手で袋を探りながら  
道に出て行きます。

石と、石と、石が絶えなく繋いで  
道は石垣に挟まれています。

石垣は錆びた門をしっかり閉め  
道の上に長い影を落とし

道は朝から夕方まで  
夕方から朝を通りました。

石垣に手探りしながら涙を流し  
見上げると空は恥じ入るほど青いです。

草一株ないこの道を歩むのは  
石垣の彼方に私が存在するからであり

私が生きているのは、ただ、  
失くしたものを探すのです。

1941・9・31

詩人は何かを無くしたため、道にいるのである。何を無くしたのだろうか。元々あるはずのものを無くしてしまい、道を歩けば探せると信じている。そして、道に映された「影」は彼から分離した自分でもあり、鉄の門と石垣とを隔てて自分がいるところには行けず、涙を流す。結局、詩人は自分がこの道を歩むのは、まだ分離した自分が残っているためであり、生きているのは失くしたものを探しているからだと言っている。

「垣の彼方に私が存在するからであり」というところは「石垣で自分の姿は見えないが、この道を歩けば、必ず、自分が見つかる」というように解釈することもできる。尹東柱はこの時、自分が「自己」を無くしたと考えたのではないだろうか。そして、その後に「星を数える

夜」という詩を書いて、自分と関連がある、幼少期の友人、「北間島」、「お母さん」、過去の詩人たちの名前を通じて、自分の存在を探そうとしているのである。なぜなら、人間の自己同一性を作る「故郷」は「人間実存の根底」<sup>36</sup>であるからである。

この時期の尹東柱は「自分は誰なのか」という質問を常に自分に投げかけていたと考えられる。「星一つに美しい名前を読んでみるが、それらは星のように遠くにいる」と尹東柱が考えていた「追憶」と「愛」と、さらに子供たちの名前、「鳩」、「子犬」、「フランシス・ジャム」のようなものたちはいつも自分の身近にいて、自分のものだと思っていた。しかしそれらは現在遠い場所にいて、今にも失われそうであり、それらがなくなる時、＜尹東柱＞という存在も失われるのではないかと考えたのであろう。

1941年、延禧専門学校で卒業を迎える尹東柱は、自分が進むべき道を見失っていた。そこで、自分が生まれ育った場所、友達、記憶、詩人など自分が大切にしていたものの名前を通して、自分を再確認し、これからの進むべき道を決めたかったのではないか。その後書かれた「序詩」の「星を歌う心で／すべての死んでいくものを愛さなければ／そして、私に与えられた道を／歩かなければ」という言葉から、彼は、自分に「与えられた道を歩む」ことを決めたことが分かる。

進むべき道を失った時、彼の心は常に故郷「北間島」に目を向けて、故郷に自分を戻し、そこから出発の道を決めようとする。故郷はいわゆる離郷の出発点でもあり、次の人生の始まりにもなる。そしてこの道をなくしたがゆえの、終わることのない〈自分探し〉の道は、詩「星を数える夜」に見て取れるようにその都度、地理としてのまた心にいつもある故郷「北間島」から始まるのである。

<sup>36</sup> ジョン・クアンシク『故郷』、文学と知性社、2010、p.31.



#### 4. 異国で懐かしむ——日本・東京で書く

延禧専門学校を卒業した尹東柱は、従兄の宋夢奎と一緒に日本の京都帝国大学（現京都大学）に留学しようとしたが、その時、宋夢奎は合格し、尹東柱は不合格だったため、尹東柱は再び東京にあるキリスト教系の立教大学に進学することになり、宋夢奎は京都帝国大学に進学する。尹東柱自身は京都ではなく、東京で生活することになる。ここから、一人で生活しなければならない、東京に行くこととなったのであり、結果として、より寂しい場所に彼は閉じ籠ることになったと思われる。

そのような環境の東京で、詩人の言語はより研ぎ澄まされていくこととなる。この日本でも詩を書き続けた彼だが、現在、日本で書かれた詩は5篇しかないにもかかわらず、未完成の詩「春」以外の4篇には強い郷愁が見られる。その中で最も「北間島」という故郷についての思いが書かれた詩はこの「容易く書かれた詩」という詩である。

##### 容易く書かれた詩

窓外に夜の雨が囁き  
六畳のこの部屋は他人の国。

詩人というのは悲しい天命であると知って  
いても  
一行の詩を書いてみようか。

汗の匂いと愛の匂いが ほのぬくく漂う<sup>37</sup>  
送ってくださった学費封筒を受け取り

大学ノートを脇に挟み  
老いた教授の講義を聞きに行く。

考えてみれば幼い時の友達は

一人、二人と全て失い

私は何を望んで  
私はただ、一人で沈潜するのだろうか？

人生は生きがたいと言われているのに  
詩がこんなに容易く書かれるのは  
恥ずかしいことだ。

この部屋は他人の国  
窓外は夜の雨が囁いているのに、

灯火をともして 暗闇を少し追い出し、  
時代のように来る朝を待つ最後の私、

私は自分に小さな手を伸ばし  
涙と慰安で握る最初の握手。

1942・6・3

「他人の国」である日本に留学した尹東柱の故郷に対する強い郷愁がこの詩から感じられる。渡航するために、彼は名前を「平沼東柱」に変えたが、日本を「他人の国」だと考えた。雨の日のしかも異国の日本東京における生活の中の、ある日である。一人だけの孤独な部屋でこの詩は生まれた。ここで、六畳の部屋と雨の囁きは尹東柱が寂しい他人の国で、孤独の状態にいたことが想像できる。彼のこの孤独の由来には二つのことがある。一つは異郷による疎外感<sup>38</sup>であり、ともう一つは「故郷」にいる家族と友達から離れたことによって生まれた孤独である。「六畳部屋」から始め、文化も習慣も違う異国で生活をしながら、心の深いところにある話を分かち合える友人を持たず、尚且日本帝国主義のもとの日本人を見て、尹東柱は疎外を感じていた。これらの詩がソウルにいる友人に書いた手紙の中に入っていたよ

<sup>37</sup> 尹東柱『空と風と星と詩』（金時鐘編訳、岩波文庫、2012）「容易く書かれた詩」の訳から「ほのぬくく漂う」という言葉を引用。

<sup>38</sup> 渡部治「尹東柱の詩と思想について」、『国際経営・文化研究 Vol.9 No.1』、2004.11.「六畳」という言葉の響きが、暗示の力を持って異郷における疎外の心根を否が応にも高めている。

うに、家族や友人との連絡は手紙を通さなくてはならなかった。

そのような孤独から、尹東柱は両親から送られてきた学費封筒を持って授業に行くかつての自分のことを描いている。そのとき同時に幼いころ一緒にいた友達のことを思いだし、ここにも地理と心の故郷たる「北間島」に視線は向かっている。ただし眼の前の風景は帝国日本の首都に囲まれて、現実は今やかつての友人や親しいひとが誰もいない場所である。そこにただ一人で「沈黙」している自分を確認する。

尹東柱が東京の立教大学にいた時期は極めて短い。1942年4月に入学した尹東柱は7月に一回故郷「北間島」に戻り、その後の10月に京都にある同志社大学に転校した。同志社大学は今まで通っていた学校と同じくキリスト教系の学校でありながら、尹東柱が最もよく愛読していた詩人鄭芝溶が日本留学した時に通っていた学校でもある。立教大学を退学し、東北帝国大学（現在の東北大学）に進学しようともしていたが、京都の同志社大学を選択した理由の一つに、詩人鄭芝溶の影響があると言われている。ここでもまた、上の3節で述べたように、尹東柱は故郷「北間島」に帰って自己の存在を確認し、そこで次の進路を決めたのである。このとき彼は愛読した先輩詩人が通っていたキリスト教の学校を選択した。このことから「北間島」は彼にとって、いつも出発点であり、「始まりの場所」であることが確認できる。

東京の「六畳のこの部屋」で、孤独と異言語・政治の場所、疎外感の中、「彼は慈愛に満ちた故郷の父母のことを思い、すべて去っていった旧友たちのことを思い、一人深い孤独の中に沈んでいるようだ」<sup>39</sup> 人生の中で最も孤独だった時間と空間にあって、彼は故郷にいる家族、自分の学業を支えるために懸命に働いている両親と幼い時に仲の良かった友人を懐かしみながら、ここにしか居場所の無い自分

を慰めていた。

## おわりに

絶えず移動する人生を生きた尹東柱の人生のルートを簡単に示せば「明東→龍井→平壤→龍井→ソウル→東京→京都→福岡『→龍井』」となり、彼は離郷と帰郷を反復していた。

1935年9月、尹東柱ははじめて故郷「北間島」を離れ、精神の故郷たる「朝鮮」の平壤で勉強し、その時から、彼に郷愁という感情が生まれ始めた。それが平壤に行って一ヶ月も経たないうちに書かれた「南の空」という詩に表れている。彼が平壤で書いた故郷「北間島」という場所は、まだ幼い少年として、母の懐が懐かしい、また心が安住、安心する家に戻りたい場所として現れた。しかし「北間島」を離れたからこそ見えた故郷の現実もある。それは「満洲」地域を巡って日本と中国の間の争いが視野に入り、自分が成長した場所の「特殊性」についても認識するようになる。「朝鮮」と「満洲・北間島」の両地域に対する彼の心の葛藤が見られた。

そして、二度目の離郷、「延禧専門学校」にいた時、「北間島」という場所は、最も親しい母がいる場所、幼い時の友達との追憶がある場所としても現れているが、それに加えて「北間島」は彼を育てた文化、環境、そして〈尹東柱〉という存在を探すルーツでもあった。卒業の前、進むべき道を見失った彼は、どこに行くべきなのかを考える際、自分のルーツである故郷「北間島」から、幼い時に遊んでいた自分の友達と、読んでいた詩人の名前など、自分と関連がある名前を通して、「自分」という存在を模索したと考える。また離郷と帰郷を反復する中、進むべき道を失った時、彼の心は常に故郷「北間島」に目を向けて、故郷に自分を戻し、そこから出発の道を決めようとする。つまり「北間島」は次の場所への上陸する起点で、いつも自分の進む道を確認する場

<sup>39</sup> 宇治郷毅『詩人尹東柱への旅——私の韓国・朝鮮研究ノート』、緑蔭書房、2002。

所であり、次の道に進む方向を示してくれる場所でもあり、そして「終点」でもあった。

さらに、三度目に故郷を離れ、日本に留学した時期は、いわば「朝鮮」と「満洲」の植民地宗主国で生活しており、彼は故郷「北間島」にいる家族と幼い頃の日々を思いながら孤独の中にいる自分を慰めた。民族的教育とキリスト教教育を両方受けながら、思想がますます熟し、植民地期の朝鮮や日本という異郷での郷愁の中、彼を支えたのは、故郷の家族と家であった。

このように、彼は故郷から離れた全ての場所から故郷「満洲・北間島」、つまり生まれ育った場所、家族や友達がいる場所を懐かしんでいた。そこは母の懐がある場所、孤独の中で自分を慰める場所、また自己存在の根源地でもあった。尹東柱は「朝鮮」と日本に留学して以来、1943年の冬休みを除いて、休みの時はいつも「北間島」に戻った。体は「故郷」を離れていたが、心は常に家と家族に向いており、また最も帰りたい場所でもあった。「北間島」での暮らしについて、尹東柱より1歳年下の従弟はこのように証言した。

「春が来れば村山はツツジ・ゲサルグ花・サンエンツ花・シャクヤク・ナリコト・オキナグサ・バンウルコトが競いながら咲き、川辺に生い茂るバンチョンにはヤナギが満開して村は花と香りの中に埋め込まれた武陵桃園だった。…（中略）

冬の景色はさらに印象的だった。大雪が降る日には鹿の群れ・イノシシの群れが餌を探し村に降りてきて、その日には、町中が興奮の中で浮き立ったりした。シラカバのこま回し・橇滑り・スケート、鞭を持ってキジ狩りを見るために付いて歩くなど明

東村の冬は消えない思い出だったはずである。」<sup>40</sup>

尹東柱にとっても生まれ育った「北間島」はツツジ、ライラック、タンポポ、海棠というような花が咲き（「花園に花が咲く」など）、空は青く、気持ちの良い風が吹き、犬、鳥、そして蝶々などがいる場所だった。

「満洲国」が成立した1932年までの明東は、朝鮮語は勿論、思想や教育に比較的自由であって、家も経済的に裕福だった彼は、他人を羨ましく思わず過ごせた。また、美しい自然やいつでも遊べる友人がいる場所には彼にとって忘れられない記憶が多くあったに違いない。ゆえに、尹東柱が日本にいた時、叔父に「将来私が生まれ育った明東に住みたい」と答えたのだと考える。

『尹東柱評伝』を書いた宋友恵は「北間島」明東村を「尹東柱の詩的感受性が形成された場所」<sup>41</sup>だと評価をしている。本論文筆者もこのような地理的故郷であり、実際に生まれ育った場所があるからこそ、尹東柱自身と彼の詩が生まれたのではないかと考える。「北間島・明東」という場所に対する親しみは彼が幼少期からそこで多くの経験をしたからであり、そこが彼にとっての本当の故郷である。人の心の底には、幸福をもたらしてくれる、思いを馳せる場所がある。尹東柱にとってのそのような場所は「北間島・明東」であろう。

1943年の7月14日に、尹東柱は京都で特高警察に逮捕された。尹東柱の弟尹一柱の証言によると、尹東柱は夏休みを控え、故郷にいる父親に「帰郷する旅費を送ってください。お金が到着次第、出発します」という手紙を書き、手紙を受けた父はすぐにお金を送ったが、すでに手遅れであった<sup>42</sup>。自身の身の危険を予感し、「故郷」に帰ろうとしたのかもしれないが、その帰郷の願いは実現できなかった。

<sup>40</sup> キム・ジョンウ「尹東柱の少年時代」『ナラサラン（愛国）23号』。

<sup>41</sup> 宋友恵『空と風と星の詩人 尹東柱評伝』、ソジョン・シカク、2015、p.74.

<sup>42</sup> 同上、p.370.



歴史的に「北間島」という場所は、中国に属し、1932年満洲国が造られてからは日本の領域になった。しかし民族の異郷(北間島)は、始めから彼にとって故郷であった。研究シーンは現在まで、「北間島」を異地として考え、日本の植民地支配により民族の故郷が奪われたとみなし、結果、安住する場所がなく移動し続けた「ディアスポラ」詩人として彼を記述してきた。しかしこのような「故郷喪失」の詩人として尹東柱を考えることについて、もう一回慎重に考えるべきではないだろうか。

尹東柱が福岡刑務所で亡くなったということが家族に伝わり、その時日本に確かめに行こうとした父親尹永錫を彼の祖父が止めたと言われている<sup>43</sup>。しかし、彼の父親は危険を冒してでも、日本へ息子の体を確かめに来た。灰は玄界灘に撒かれ、粉骨は「北間島・明東」に持ち帰られ、通っていた東山教会の墓地に埋められた。尹東柱の祖父が自分のために用意した墓碑を、先に他界した孫のために使うとは、祖父も含めて誰も想像しなかっただろう。生前、どこにいても故郷「北間島」のことを懐かしみ、最も帰りたい場所「明東」に尹東柱は生きて帰ることができなかった。

今までの尹東柱の「故郷」に関する研究は、尹東柱の「祖国・朝鮮」の喪失によって故郷喪失という事態に至り、また生まれた場所の特殊性により彼を故郷がない詩人として、この世に漂流し、常に移動し続けた「遊浪詩人」、ディアスポラ詩人、国境なき詩人として、彼を位置付けようとしてきた。これは、彼の民族としての故郷だけを強調し、「朝鮮」という民族的視点から彼を考えたからである。政治的力により、地理的、民族的「故郷」は法律上喪失したが、彼の中では「故郷喪失」という考えは見られなかった。それは心の中に故郷はいつも存在し続け、喪失したと考えていないと思ったからではないだろうか。尹東柱は終始朝鮮語で詩を書いた朝鮮民族の詩人であるため、

韓国または朝鮮で生まれるべきであった彼が、「北間島」という特殊な地域で生まれたため、故郷も特殊であり、つまり普通でない、と考えて来た。しかし、尹東柱は「北間島・明東」が彼の心に実在する故郷であり、しかもそこは生まれ育った故郷、民族と理想(キリスト教)という三つの「故郷」なのである。

これまで、特に韓国における研究に多いだが、「民族」や「朝鮮」からの視点からのみ、彼自身と彼の文学世界を考え、その文学世界の持つ意味を「民族」という範疇に閉じ込めて来た。尹東柱の詩が持つその他の場所、すなわちそこにおける言語という大切な可能性を探ることが少なかった。

ゆえに今後尹東柱研究が辿るべき方向性は、彼には故郷—「北間島」があるということをも前提にした上で、そしてまた彼がいつも心に保っていた「北間島」を蔑ろにしない形で、詩人とその言語を考えることではないか。その時、今まで見られなかった尹東柱による文学表現の特徴と詩人尹東柱という存在に、新たな生命を見出す研究が生まれるのではないかと本論文筆者は考える。

<sup>43</sup> 同上、p447.

【参考文献】

- 尹東柱 『天と風と星と詩』、正音社、1955。
- 尹東柱 『空と風と星と詩』(伊吹郷訳、影書房)、1984。
- 尹東柱 『空と風と星と詩』(金詩鐘訳、岩波文庫)、2012。
- 왕신영・沈元燮・大村益夫・尹仁石共同出版『写真版・尹東柱自筆詩稿全集』、民音社、1999。
- イーファー・トゥアン 『空間の経験—身体から都市へ』、ちくま学芸文庫、2009。
- 宇治郷毅 『詩人尹東柱への旅—私の韓国・朝鮮研究ノート』、緑蔭書房、2002。
- 金珽実 『満洲間島地域の朝鮮民族と日本語』、花書院、2014。
- 蔵田雅彦 「韓国キリスト教が生んだキリスト者詩人・尹東柱」、『新版 死ぬ日まで天を仰ぎ—キリスト者詩人・尹東柱』、日本基督教団出版局、2005。
- 渡部治 「尹東柱の詩と思想について」、『国際経営・文化研究』 Vol.9, No.1、2004。
- 宋友恵 『空と風と星の詩人 尹東柱評伝』(愛沢革訳、藤原書店)、2009。
- 김관웅 「디아스포라시인 윤동주의 시와 북간도」、『尹东柱文学论』、延边人民出版社、2013。
- 김정우 「윤동주의소년시절」、『나라사랑』 23 호、1976。
- 리미숙 「윤동주시에 드러난 장소와 장소상실」、『尹东柱文学论』、延边人民出版社、2013。
- 박금해 「20 세기 초 간도지역 기독교계 학교의 설립과 민족교육」、『윤동주와 그의 시대』、연세대학교 국학연구원 연세학풍연구소 편、2018。
- 송우혜 『윤동주 평전』、서정시학、2015。
- 리광인 『시인 윤동주 인생려정』、민족출판사、2015。
- 오문석 「윤동주와 다문화적 주체성의 문학」、한국근대문학회、2012。
- 오양호 「尹東柱 詩에 나타난 故郷의 의미」、조선어 문학회、1988。
- 윤영춘 「명동촌에서 후쿠오카까지」、『나라사랑』 — 23 호、1976。
- 정한모 「尹東柱의 特質과 詩史的 意味」、『심상』、1975. 2。
- 정우택 「在朝鮮人の混種的正体성과 尹東柱」、『어문연구』、한국어문 교육연구회、2009。
- 장춘식 「윤동주 시의 이민문학적성격」、『尹东柱文学论』、延边人民出版社、2013。
- 전광식 『고향』 문학과지성사、2010。